

漢詩神奈川

第 39 号

神奈川県漢詩連盟
事務局

横浜市鶴見区岸谷
4-28-23-301

TEL-FAX
045-573-3045

発行人 香取和之
編集人 久川憲四郎

創立二十周年記念行事（十月十二日他）に参加しよう！

神奈川県漢詩連盟会長 香取和之

神漢連は二〇〇六年（平成十八年）に七十八名で創立され、本年十月に二十周年を迎えます。そして、二十周年を祝って十月十三日（火）に中区の横浜市開港記念会館で記念行事が開催されます。

1. 二十周年を祝う記念式典
2. 全漢詩連会長鷺野正明先生による漢詩講演会
3. 自詠漢詩作品展
4. 神漢連の活動紹介（注、三・四項は十二日も開催）



香取和之会長

記念行事の内容
容は、本会報の次
頁に記載されて
いますが盛り沢
山です。またその
夜は、二十周年を
祝いつつ会員間

の親睦を深める祝賀会を予定しています。是非、多くの会員が積極的に参加して楽しみ、また二十周年の意義を噛みしめることを心から願っております。

二十周年記念事業としては、上記以外に、各会員の記念作品を集めた神奈川清韻第四集（九月十五日刊行）、神漢連二十年史―この十年の歩み（九月十五日刊行）、神漢連オリジナル手拭の頒布（十月）、金沢八景への吟行会（十一月十七日）などを予定しております。

尚、これらの記念行事を行うために、皆さんに寄付のお願いをしなければなりません。全会員に四月に郵送した総会資料に、寄付の振り込み用紙が同封されています。未だ振込まれていない方は、是非宜しくお願い致します。

本年前半の神漢連の大きな行事といえ、二月のオンライン吟行会、四月から五月の五

日間に開催された漢詩入門講座と、総会（今年は書類審査方式）、六月の漢詩講演会が挙げられます。

漢詩入門講座は神漢連創立以来、毎年開催しており、今年は二十期として二十四名の方々が受講し、十九名が七言絶句一首の卒業詩を提出して無事終了しました。例年通り、神漢連に入会して漢詩創作を目指す方々は二十期の漢詩サークルを結成しますので、温かく見守り願います。一方、漢詩鑑賞に注力されたい方々は、「鑑賞入門講座」（通称、鑑賞会D）で、中国・日本の代表的な詩人の漢詩を対面方式で毎月分かり易く学べます。尚、神漢連入会数年以内の方々も聴講可能です。

漢詩講演会は高芝麻子先生が「杜甫と家族―日常を愛し日常を詠う」と題して、杜甫と家族の関係から話を始められ、家族を描く杜甫の温かな詩が、どのように漢詩の世界を豊かにしたかを色々なエピソードを交えて話され、凡そ百六十名の多くの聴衆が熱心に聞き入っていました。

ところで、着実に漢詩を学ぶ方策を明確化して、会員のレベルアップを図ることは常に重要な課題ですが、一年前の会報三十七号一面に記した方針を、今年も継続して推進していきます。再度確認願います。今年も漢詩の鑑賞や創作を通して自己研鑽を積み、また漢詩の仲間との交流を通して豊かな人生を送りましょう。

創立二十周年記念行事「20周年漢詩祭り」を盛大に

記念イベントに参加して共に祝おう！

神奈川県漢詩連盟は、創立以来「漢詩を学ぶ、漢詩で遊ぶ」をモットーに、諸先輩面々のご尽力で、他地域に類を見ない多彩な活動を立ち上げ、活発に運営されてきました。コロナ禍最中の十五周年行事では、窮地を逆手にとってオンライン方式での活動をあみ出して、活動の幅を更に広げて参りました。

一方で、サークル活動の大半は対面方式に戻ったものの、鑑賞会や吟行会開催はオンライン方式が当たり前となり、実際に顔を合わせて活動し、所属サークルを超えて他の連盟会員と触れ合う機会が減ってきています。

記念行事の目的

「会員間の親睦活性化」「サークルを越えた交流の促進」を目的に掲げ、吟行会や旅行企画の行事を復活させるなど対面によるイベントを多数開催して、会員同士の人と人との繋がりを取り戻したいと考えています。

そして、連盟全体の結束を強くして、神漢連の発展が今後も継続することを目指しています。是非、この趣旨をご理解頂き、記念イベントに積極的にご参加下さるようお願いいたします。

更には、「漢詩文化の魅力を広く社会へ発信」もその目的の一つに据えて、対外的な情報発信にも努めて参ります。

記念行事の概要

「記念式典」

十月十三日(火)午後一時～、横浜市開港記念会館講堂で開催します。

- ・来賓 全日本漢詩連盟会長 鷺野正明先生
- ・神漢連二十周年の歩み
- ・功労者表彰
- ・文部科学大臣賞受賞作の吟詠
- ・文部科学大臣賞受賞会員の講話

「記念講演会」

記念式典に引き続き、午後三時～、同会場で開催します。

- ・講師 全日本漢詩連盟会長 鷺野正明先生
- ・演題 美しい日本の風景―日本漢詩への誘い―

・チラシが同封されていますので、多くのお知り合いをお誘いください。

「祝賀会」

記念式典・記念講演会終了後、午後五時～ブリーズベイホテルで開催します。

「自詠漢詩作品展」の開催(同封別紙参照)

記念式典前日から、横浜市開港記念会館一階会議室にて一般公開で開催されます。

- ・自詠漢詩を題材とした書・画・写真等の自作作品展
- ・自詠自書は、入門講座・錬成会も開催

「活動紹介コーナー」の設置

自詠漢詩作品展会場の一角に、同展開催中設置して、神漢連諸活動を紹介します。

- ・各漢詩鑑賞会・神辞会・オンライン吟行会・叢書発行・その他諸活動を紹介

・揭示物・資料配置に加えて、担当係員による会員・連盟外向け口頭説明・宣伝を実施

「記念グッズ」の制作頒布

記念式典会場・自詠漢詩作品展会場で、頒布されます。(1枚五百円)

- ・神漢連オリジナル手拭い(司馬光・初夏)

「記念吟行会」の開催(同封別紙参照)

十一月十七日、金沢八景でのリアル吟行会を復活開催し、高芝麻子先生のご指導を受けます。

「旅行企画」の実施(同封別紙参照)

・十月三十一日～十一月一日、全国漢詩の祭典高知大会・吟行会への参加を含む旅行企画を実施します。

「神奈川清韻第四集」の発刊

百四十首の会員投稿詩を掲載した詩集を、9月に会員全員に無料配布します。

「神漢連二十年史―この十年の歩み」発行

十年史以降の連盟諸活動の歩みを取りまとめ、会報第40号特別記念号として九月に発行します。(牛山知彦記)

連盟の行事

令和七年度実績と令和八年度計画

事務局長 久川憲四郎

令和八年度総会は、今秋、神漢連は創立二十周年を迎えるにあたり記念式典開催を計画していることから、定期総会の実開催はせず、書面決議とすることとし、五月十五日を期限に質問や異議を取り纏めることとした結果、期限までに異議なく承認された。

その内容は、まず、令和七年度実績として、①神漢連規約の大幅な見直し、②会員の詩力アップに向け初級者用として「鑑賞入門講座(鑑賞会Dを新設)」など。そして中・上級者用として、全国漢詩大会への積極的応募や外部機関での作詩指導受講の推奨に取り組んだ。七年度漢詩入門講座は三十五名が受講され三十名が卒業詩を提出、二十四名が入会した。鑑賞会A B C D・霧笛女子会・大簡会・漢詩講演会・オンライン吟行会・漢詩研修会・神辞会・自詠自書展等を予定通り行った。

令和八年度計画としては、十月に創立二十周年を迎え、十月十三日に横浜市開港記念会館にて記念式典を予定。記念行事としては、神奈川清韻第四集の発刊、神漢連二十周年史―この十年の歩み―の編纂等一連の事業計画を書面提示し承認された。

令和7年度一般会計決算			令和8年度一般会計予算			令和7年度田原会計決算			令和8年度田原会計予算				
収入	前年度より繰越	627,328	収入	前年度より繰越	485,453	収入	前年度より繰越	946,257	収入	前年度より繰越	946,257		
	年会費	716,500			叢書頒布等		0			叢書頒布等	15,000		
	行事参加費	418,000			その他		0			その他	1,000		
	その他	73,980			収入計		946,257			収入計	962,257		
	収入計	1,835,808			20周年関係収入	1,215,000	支出	叢書刊行	0	支出	叢書頒布等	10,000	
支出	庶務費	533,150		収入計	2,888,453			その他	0			その他	5,000
	広報事業費	211,518	支出	庶務費	220,000			支出計	0			支出計	15,000
	教育事業費	366,257			次年度繰越	946,257	残	次年度繰越	947,257				
	全漢連費	231,350		令和7年度神奈川県漢詩連盟資金残高						3/31/2026			
	その他	8,080				振替口座預金	現金	計					
	支出計	1,350,355			一般会計	404,408	81,045	485,453					
	残	次年度繰越	485,453		支出計	2,588,453		田原基金会計	940,092	6,165	946,257		
				20周年関係支出	1,330,000		計	1,344,500	87,210	1,431,710			
				支出計	2,588,453								
			残	次年度繰越	300,000								

「杜甫と家族―日常を愛し日常を詠う」
―高芝麻子先生講演会―

令和八年六月五日(金)横浜市開港記念会館講堂に於いて、横浜国立大学教育学部教授高芝麻子先生による「杜甫と家族―日常を愛し日常を詠う」の漢詩講演会が開催されました。会場は百六十名の来場者で盛会となりました。



講演は、盛唐の時代が安史の乱によって終りを遂げた後を生きた杜甫が、新しい文学の扉―家族を詠う道―を開いて行ったことをテーマに、行われました。杜甫は、戦乱に翻弄されたものの、妻楊氏との間に五人の子(一人は夭逝)を授かり、一生一人の女性と添

い遂げた人生を送りました。それを踏まえた上でいくつかの作品が取り上げられました。ここでは比較的知られている「月夜」「春望」「江村」は、紙面の都合上省かせていただきます。

七五五年冬「自京赴奉先県詠懷五百字」(抜粋)

入門聞号咷 門に入りて号咷を聞く
幼子飢已卒 幼子飢えて已に卒す
吾寧舍一哀 吾寧ぞ一哀を舍かんや
里巷亦鳴咽 里巷も亦た鳴咽するあり
所愧為人父 愧ずる所は人の父と為り
無食致天折 食無くして夭折を致す
豈知秋禾登 豈に知らんや秋禾の登れるに
貧簞有倉卒 貧簞には倉卒有るを

不在にしていた家に戻ると、幼いわが子の死に直面することになった杜甫が作った作品です。悲痛な出来事を文学として詠んでいます。

七五七年春「憶幼子」

驥子春猶隔 驥子は春に猶お隔たり
鶯歌暖正繁 鶯歌 暖かくして正に繁し
別離驚節換 別離 節の換わるに驚き
聰慧与誰論 聰慧 誰と与にか論ぜん
澗水空山道 澗水 空山の道
柴門老樹村 柴門 老樹の村
憶渠愁只睡 渠を憶いて 愁いて只だ睡り
炙背俯晴軒 背を炙りて晴軒に俯す
次男の驥子を詠んだ作品です。四句目の「聰

慧与誰論」は、「うちの子はこんなに賢いということを誰に言えばいいのだろうか」と詠んでいます。ここにも家族を詠うという文学の新しい方向が見られます。

七五七年秋「得家書」(抜粋)

去憑遊客寄 去るは遊客に憑りて寄せ
來為附家書 来るは家書を附するが為なり
今日知消息 今日 消息を知る
他鄉且旧居 他郷なるも 且つ旧居なり
熊兒幸無恙 熊兒 幸にして恙無く
驥子最憐渠 驥子 最も渠を憐れむ

この作品の前、七五七年夏「述懷一首」では、音信の途絶えた家族によからぬことが起きたのではないかという妄想を抱いてしまっただけで、杜甫は詠んでいました。この詩で、家からの手紙が届き、大喜びをしている様子が詠まれています。

七五七年秋「北征」(抜粋)

況我墮胡塵 況んや我胡塵に墮ち
…省略…
粉黛亦解苞 粉黛 亦た苞を解き
衾綯稍羅列 衾綯 稍や羅列す
瘦妻面復光 瘦妻は面復た光り
痴女頭自櫛 痴女は頭自ら櫛る
學母無不為 母を學びて為さざる無く
曉妝隨手抹 曉妝 手に隨いて抹す
移時施朱鉛 時を移して朱鉛を施せば
狼藉画眉闊 狼藉として眉を画くこと闊し

生還対童稚 生還して童稚に対すれば
似欲忘飢渴 飢渴を忘れんと欲するに似たり
問事競挽鬚 事を問いて競いて鬚を挽くも
誰能即嘖喝 誰か能く即ち嘖喝せん
…省略…

戦乱のため、離れ離れになっていた家族のもとに辿り着いた時の感慨を詠んだ作品です。妻へのお土産の化粧道具を、母親の真似をして使ってしまったり、ひげを引っ張って話をせがんだりする子どもたちを、どうして叱ることなどできるものかと詠んでいます。七六二年春夏「屏跡三首 其三」でも、日常のだらしない様子にさえも幸福を見出す気持ちが詠まれています。

七六三年春「聞官軍收河南河北」

劍外忽伝収薊北 劍外に忽ち伝う 薊北を収むと
初聞涕淚滿衣裳 初めて聞き 涕淚 衣裳に満つ
却看妻子愁何在 却りて妻子を看れば 愁い何くにか在る
漫卷詩書喜欲狂 漫ろに詩書を巻きて喜びて狂せんと欲す
白首放歌須縱酒 白首放歌して 須く酒を縦にすべし
青春作伴好還鄉 青春伴を作し 好し郷に還らん
即從巴峽穿巫峽 即ち巴峽より巫峽を穿ち
便下襄陽向洛陽 便ち襄陽に下りて洛陽に向かわん
戦乱終結の報を聞いて、衣が涙でびしょぬれになるほど泣いて喜び、意味もなく本を巻いてみたり、大声で歌って酒を飲んだりする様子が描かれています。七六三年冬「発閬中」という作品では、戦乱後職を求めて家を離れたものの、娘病気という報を得て、狼狽えて

帰宅を急ぐ様子が詠まれています。そして最後は、次男宗武の誕生日を詠んだ作品が取り上げられました。

七六六年秋「宗武生日」

小子何時見 小子 何れの時にか見る
高秋此日生 高秋の此の日に生まる
自從都邑語 都邑の語りてより
已伴老夫名 已に老夫の名を伴う
詩是吾家事 詩は是れ我が家の事
人伝世上情 人は伝い世上の情
熟精文選理 文選の理に熟精して
休覓綵衣輕 綵衣の軽さを覓むるを休めよ
凋瘵筵初秩 凋瘵 筵初めて秩し
欷歔坐不成 欷歔 坐するも成らず
流霞分片片 流霞 片片に分ち
涓滴就徐傾 涓滴 就ち徐ろに傾けん

我が家は詩を作るので有名だがお前はその名を立派に継いでいる、お前の誕生日に年老いてゆっくり杯を傾け、しあわせに浸っていると詠んだ作品です。しみじみと、杜甫の家族への愛を味わわせていただいた講演会でした。

尚、本講演は神漢連HPの「神漢連You Tube」に登録されており、講演時と同じように視聴することが出来ます。是非ご覧ください。
(五嶋美代子記)



熱心に聴く会場一杯の皆さん



春望を講演中の高芝先生

令和七年度研修会

―一年の締めくくり―

令和七年度の研修会は、二十名の方からの投稿により、十二月十九日(金)に「かながわ労働プラザ」で開催されました。

今年も若い方の参加が目立つ顔触れで、十九期生二名を含め、十五期生以降だけで六名、十期以降では十四名でした。

「研修会」は、神奈川県漢詩連盟発足時、それも準備活動の段階で、「初心者入門講座」「吟行会」となれば三本柱として位置付けられた、伝統ある行事です。(本誌十周年特別記念号「参照」)

会員の詩力向上を目指して始められたもので、いち早く俳句の世界で広く行われている「選句会」の方式を採り入れたことにより、遊びの要素を加味

しながら、会員相互の啓発と、

サークルへの参加の有無や世代を乗り越えた交流・親睦の促進が図られてきました。

匿名の投稿詩の中から、推薦詩を投票し合い優劣を競うと同時に、その結果



受賞者を囲んで

を伏せたまま、議論し合うというやり方を今回も踏襲しましたが、各詩につき活発な発言が相次ぎ、有意義な意見交換の場となりました。

その結果、高点を果たした左記の方々と、特別賞として小森香織さん(老八会)と金澤武司郎さん(聚鳩会十九期)が表彰され、香取会長から賞品が授与されました。

終了後は近くで盛大な懇親会を行い、令和七年を締めくくりました。(白石信隆記)

優秀賞

消夏渡繩橋

消夏繩橋を渡る

火雲江峡踏橋行

火雲の江峡 橋を踏んで行く

山色萬重風日清

山色万重風日清し

毛骨悚然涼透骨

毛骨悚然として 涼骨を透る

徒看直下碧瀾平

徒だ看る 直下碧瀾平なり

金星千支会 福田忠夫

優良賞

同期会有感

同期会感有り

今日芳筵喜氣新

今日の芳筵 喜氣新たなり

白頭老秃語青春

白頭老秃 青春を語る

會終僚友期重對

会終りて 僚友重ねて対せんことを期するも

明歳相逢有幾人

明歳相逢うは幾人か有る

十期会 細江利昭

佳作

紅柿思親

紅柿思親

紅殘熟柿雪霏侵

紅残の熟柿 雪霏に侵され

霜冷荒庭老木陰

霜冷の荒庭 老木の陰

昔日兩親栽植處

昔日の両親 栽植の処

滄桑回首望郷心

滄桑回首 望郷の心

いななき会 向井恒泰

研修会で優秀賞を受賞して

金星千支会 福田忠夫

全体で参番なのに役員が辞退され繰り上げで入賞となり恐縮しております。

静岡の大井川上流の寸又峡の「夢の懸け橋」を渡った時のスリル満点の光景を詠みました。長い急な吊り橋が揺れ 三百尺下の景観をやつとの思いで見えてホッとしました。

もともと木版画の紹介文として漢詩を始めて八年。いまだ満足な詩ができずに居ります。特に韻を踏む句末の下三字の使用例を搜韻で探すのに四苦八苦しております。

俳句の與謝蕪村のような詩が作れたらと夢をもちつつ「自画自詠」に精進したいと思えます。



作者匿名で意見交換

オンライン吟行会

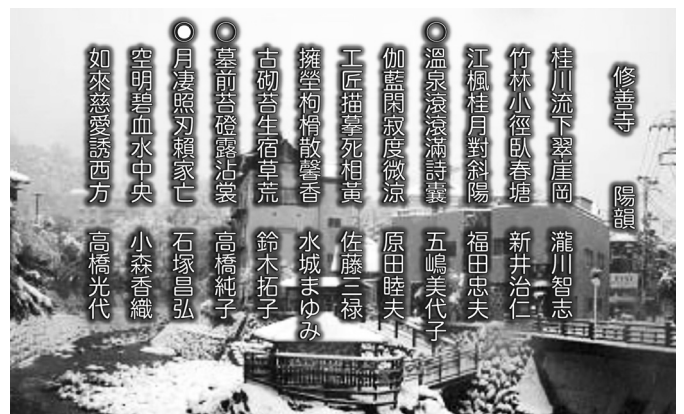
「修善寺」(二月二十三日開催)

リアルな吟行会に不向きな寒い二月と暑い八月の第四月曜に開催される恒例のオンライン吟行会ですが、今回の吟行先は誰もが一度は行ったことがある伊豆の修善寺でした。

とは言っても、現役時代の社員旅行で行っただけの方はお酒を飲んで帰ってきたことしか記憶がなく、事前のYouTube視聴によって修善寺の謂れやその地で起きた出来事、名所旧跡を再発見することが出来ました。

その上で、開催日一週間前にメールで韻字二つが知らされ、そのうち一つの韻字を使って一句を投稿することになりますが、締切は五日後ですから時間は充分。開催当日は自宅のパソコンから、参加者全員が苦労話や投稿句の背景等のコメントをしたり、先生からのアドバイスを伺ったりと、居ながら漢詩を学び・遊ぶ時間を過ごしました。今回はたまたま祝日にあたり、若年サークルへの勧誘不足もあってか、参加者数はやや低調となりました。これを踏まえて次回からは①若年サークル向けの「一句作りの手引き」を開催通知に毎回添付する、②当日不都合な場合は投稿だけの参加を認める等の改善策を予定しています。皆様の次回のご参加をお待ちしています。

◎優句 ○秀句 ●人気句 ●優句かつ人気句
(牛山知彦記)



オンライン吟行会に参加して

荅八会 石塚昌弘

オンライン吟行会で賞をいただき、大変うれしく思っております。

私は二年前に漢詩入門講座に参加し、一年前から荅八会で漢詩を作り始めた新人です。少しでも知識と経験を広げたいと思い、今回オンライン吟行会に参加いたしました。

今回の題材は「修善寺」、与えられた韻字は「彰」「亡」の二字でした。修善寺には行ったことがなく、なかなか情景が浮かびません。そこで記憶をたどってみると、三十年ほど前、単身赴任中にホテルで見た深夜放送の一場面を思い出しました。野天の風呂に月が照り、頼家に若い黒髪の女性が近づく場面です。前後の内容は覚えておりませんが、その印象だけが強く残っていました。

この記憶から、修善寺で暗殺された源頼家を題材にしようと思い、韻字は「亡」を選びました。調べると、頼家暗殺の日は元久元年七月十八日で、月齢は十七・三。晴れていれば月が出ていたはず。そこで、

月淒照刃頼家亡

月淒まじくして刃を照らし頼家亡ぶ

と投句いたしました。

講評では、「頼家」は本名なので避けた方がよいこと、「淒まじく」は日本語的用法であることを指摘いただき大変勉強になりました。今後ともご指導よろしく願います。

二十期漢詩入門講座開催

新たな会員が神漢連に入学！

本年度の漢詩入門講座は四月八日から連休を挟んで五月二十七日まで、例年通り五回で催し、応募者二十四名で卒業詩提出が十九名でした。

今年の受講生の特徴は(1)詩吟、書道の熟練者が過半で、漢詩へのニーズが高いこと、(2)作詩と鑑賞双方に関心があり、(3)連盟加入者が事前加入も含め堅調に推移しました。寺子屋授業も五班で進められ、役員各位の熱心な指導で、第四日目には各二首披露、討論する形となり、終了時間を超えるほどでした。

近年、NHKの「光る君へ」終了の余波で、応募数は減少傾向ではあるものの、都内や埼玉方を含め漢詩を志す中核層は江湖にしっかりとおられます。卒業詩題も十九名中十三名が自由題で提出され、作詩をさらに深めていく意欲を見せています。

また、一年次先輩の聚鳩会有志の方にはお手伝いと寺子屋指導もお願いし、大変ご尽力いただき、この方式は今後も続けていくつもりです。サークル結成となり初例会は七月八日(奇数月・第二水)で、講師は大森冽子、中村講二の両氏の予定です。(新井治仁記)



最優秀賞

子規初啼

一聲夢醒幾回歎

獨夜開窗聞子規

結核何堪休叫血

病牀六尺憶君姿

山口智子

子規初めて啼く

一声夢醒めて幾回か歎つ

独夜窓を開けば子規を聞く

結核何ぞ堪えんや血に叫ぶを休めよ

病牀六尺君が姿を憶ふ

優秀賞

初夏偶吟

万里薰風五月天

棕花可愛緑陰前

詩書読去無人訪

閑坐吟愁絶俗縁

初夏偶吟

万里薰風五月の天

棕花愛す可し緑陰の前

詩書読み去って人の訪ぬる無し

閑坐して愁いを吟じ俗縁を絶す

梅田京子

花時出遊

漠漠江山天地新

桜桃杏李一村春

韶光明媚難歸去

歌舞醉人花笑辰

花時出遊

莫々たる江山天地新たなり

桜桃杏李一村の春

韶光明媚歸り去り難し

歌舞の酔人花笑ふ辰

奥田英道

清興

陽光入夏緑陰稠

清昼風鈴排積憂

白屋蕭然無客訪

焚香倚机此中遊

清興

陽光夏に入り緑陰稠し

清昼の風鈴積憂を排す

白屋蕭然客の訪ふ無し

香を焚いて机に倚り此の中に遊ぶ

岩澤克恵

遊隅州櫻島

櫻發雲流南國郷

島容突兀映春光

噴炎一閃悠悠去

煙海蒼茫已夕陽

隅州桜島に遊ぶ

桜発き雲流る南国の郷

島容突兀春光に映ず

噴炎一閃悠々として去る

煙海は蒼茫已に夕陽

市川克美

漢詩入門講座を受講して

山口智子

今回の漢詩入門講座に参加する前は、「漢字ばかりで難しそう」という先入観がありました。

しかし、講義を聴き「だれ漢」を使って作詩そして添削を反復するうち、独学では「だれ漢」を理解出来なかった私でしたが、ひたすら辞書で漢字の読みと意味を引くうち不思議と文章に近づき、平仄通りに完成した際はパズルが解けたような達成感がありました。

この度は、漢詩を学ぶ機会を作っていただき、誠にありがとうございました。

最後になりましたが、先生方に教えていただきました基礎を大事にして、これからも漢詩の世界を楽しみたいと思っております。



受賞者を囲んで

令和7年度サークル活動状況

2026/4/1 現在

開始年、区分	サークル名	会員数	代表者	指導者	開催日	主な会場	特記事項
2007年(H19)・1期 2018年(H30)・12期	金星干支会	7	五嶋美代子	三村公二 新井治仁	奇数月 第2火	かながわ県民センター	・令和3年11月に、金星干支会として合流し4年が経った。昨年11月に琵琶湖東三山吟行の旅を決行した。
2008年(H20)・2期 2013年(H25)・7期 2014年(H26)・8期	三七八会	13	橋本孝一	中島龍一	奇数月 第3水	男女共同参画センター 横浜南太田	・詩稿提出は兼題・自由題で二つまで可能。詩稿提出有無にかかわらず例会に出席可。事情によりほとんど例会に出席できなくても会員可。
2009年(H21)・3期	好文会	8	高津有二	玉井幸久	偶数月 第3木	ZOOM、対面	・例会は、対面1回、ZOOM 5回。特筆すべきは、令和7年12月に「好文會詩集(第三集)」を発刊した。詩集は、各人夫々10詩を掲載した。
2010年(H22)・4期 2012年(H24)・6期	詩游以文会	8	大森冽子	—	偶数月 第3火	かながわ労働プラザ	・4期と6期合併して詩游以文会として活動。講師無しの会員による互評方式で行っている。
2011年(H23)・5期 2017年(H29)・11期	五友詩林会	8	白石信隆	住田笛雄	偶数月 第2木	ZOOM	・ZOOM 4回、対面にて1回開催した。定例会では毎回、課題詩と自由題詩の2詩を批評している。
2012年(H24)	岳精会 漢詩研究会	8	家吉幸二	三村公二	偶数月 第2水	岳精流日本吟院総本部 (川崎市)	・対面方式で開催している。令和8年2月から、三村先生から香取先生と交代した。兼題を受けて作詩し、討論形式で勉強会を行っている。
2015年(H27)・9期	九詩期会	13	山口幸雄	水城まゆみ 高橋純子	奇数月 第2木	八洲学園大学(高島町)	・結成10周年を迎えた。会員が諸橋徹次博士記念漢詩大会で最優秀賞諸橋徹次賞を受賞したのを始め、各大会で入賞者が相次いでいる。
2016年(H28)	千代田岳精会 漢詩研究部	9	田川行雄	香取和之	偶数月 第1木	MM フォレシス内サロン(みなとみらい)	・対面方式で、批評後の作品をその場で吟じ、終了後は、懇親を深めている。参加出来なかった方には批評後の全作品を送っている。
2016年(H28)・10期	十期会	7	薦 清昭	高津有二	奇数月 第3木	横浜市戸塚公会堂	・対面方式で開催。事前にご批評を受けた詩稿を修正提出し、さらなるご指導を受け互評を行っている。
2019年(R1)・13期	令和会	8	中村講二	松井秀人	奇数月 第1火	横浜市西区「フクシア」	・対面方式で3回、ZOOM方式で3回開催。例会参加者間で1対1批評を実施し、その後に講師より指導を戴く方法」を採用している。
2020年(R2)・14期	志詩会	7	東島正樹	香取和之 牛山知彦	偶数月 第3月	横浜市開港記念会館	・例会6回開催、3時間にわたり批評を受け、相互感想を述べ合っている。毎回終了後、有志で懇懇親会、12月は全員で忘年懇親会実施。
2021年(R3)・15期	逸語会	9	田内 隆	水城まゆみ 高田宗治	奇数月 第1火	かながわ県民センター	・定例会開催6回。全て対面で実施。詩作は、季節に応じた課題詩1首を提出。希望者は課題詩以外に自由題1首の提出も可。
2022年(R4)・16期	既望会	7	内山早奈江	高津有二 白石信隆	偶数月 第2火	かながわ県民センター	・すべて対面で実施している。
2023年(R5)・17期	いななき会	6	吉池 純	新井治仁 東島正樹	奇数月 第3木	かながわ県民センター	・例会以外に会員による勉強会を偶数月第二金曜日に実施。なお、参加者減少により令和8年3月末にて活動終了した。
2024年(R6)・18期	壺八会	9	佐野輝美	松井秀人 木村 孝	偶数月 第2火	かながわ労働プラザ	・例会は6回開催した。他に漢詩に関連する名所めぐりを2回開催した。
2025年(R7)・19期	聚鳩会	15	北野ますみ	久川憲四郎 高橋純子	偶数月 第4金	かながわ県民センター	令和7年6月に発足した。詠題または自由題で作詩し、例会では講師から丁寧な批評を受けている。入門講座で初めて漢詩に挑戦した方から、経験豊富な方まで、和気あいあいと意見交換を楽しんでいる。
計	16サークル	142			奇数月7 偶数月9		

漢詩鑑賞会一覧

2026//4/1 現在

名称	講師	世話人	開催日	会場	概要(2025年度の講義)
鑑賞会A	香取和之、水城まゆみ、高津有二、新井治仁、三村公二	白石信隆	毎月 第4木	ZOOM	屈原と楚辞、四時田園雑興、青龍寺題壁の詩、空海の漢詩、他
鑑賞会B	水城まゆみ	高田宗治	毎月 第4金	ZOOM	三体詩鑑賞と詩作
鑑賞会C	中島龍一、香取和之、新井治仁、高津有二、松井秀人	新井治仁	毎月 第4火	ZOOM	佩文齋詠物詩選の七言絶句の鑑賞
鑑賞会D	中島龍一	久川憲四郎、他	毎月 第1水	かながわ 労働プラザ	漢詩鑑賞入門講座。主として入会5年目迄を対象。石川忠久編「漢詩鑑賞事典」の名詩の鑑賞。
霧笛女子会	水城まゆみ、横溝比呂美、大森冽子、他	水城まゆみ	偶数月 第一火	かながわ 県民センター	各講師の講義(女流詩人の漢詩、他)

会員のたより

早や十年経ちました

千代田岳精会漢詩研究部 田川行雄

千代田岳精会漢詩研究部は発足して今年で十年となります。

千代田岳精会は詩吟の岳精流日本吟院の一部門ですが、詩吟をより深く理解することを目指して多くの会員が神奈川県漢詩連盟の基礎講座に参加しました。今、残っている平成二十八年八月七日「漢詩作成基礎講座終了詩稿」には三十名の詩稿があります。基礎講座には多くの先生方に熱心に御指導いただいたのが思い出されます。発足後は桜庭先生、香取先生に御指導いただいておりますが、諸般の事情で退会される方が出て、参加者が減ってきました。特に残念だったのは初めから熱心に御指導いただいております桜庭先生が亡くなられたことです。それ以降は香取会長が単独で御指導して頂いて居ります。

退会者が続きましたが、その後三名の新規入会者が有り現在九名で運営しております。そのうち三名は指導会に参加出来ないため、書面での参加となっております。全員詩吟の会のメンバーですので、毎回、香取先生の批評していただいた詩を吟じております。終了後は近くで一献かたむけて、親睦を深めております。

金星千支会琵琶湖の旅

金星千支会 五嶋美代子

令和七年十一月十二日、金星千支会は一泊二日の琵琶湖の旅に出かけました。メンバーは講師の三村先生、新井先生、ゲストの一人を含めた七人です。普段からサークル後の飲み会もあまりしない、おそらく神漢連では一番おとなしいサークルである金星千支会が、こんな楽しいことができるとは正直思っています。

この企画が可能になったのは、メンバーのひとり、福田忠夫さんのお陰でした。福田さんはこの地のご出身で、ホテルからマイクロバスの手配、そして見学先の案内までを一手に引き受けてくれたからです。

湖水の光の中に浮かぶ竹生島、紅に染まる木々、歴史を物語る寺院の佇まい、どれをとっても素晴らしく、まだまだ見るべきところもあつたものの、全部を見るには体力が足りなかったのは心残りですが、それぞれの詩囊はいっぱいになって帰ってきました。また、折々に交したメンバーとの会話が、今も胸に響いてくるようです。今年三月の例会では、琵琶湖の思い出をもとに作った作品を披露しました。



好文會詩集(第三集) 発刊しました

好文会 高津有二

好文会は、二〇〇九年(平成二十一年)、神漢連の三番目のサークルとして発足し、同年秋から二カ月に一回の勉強会を始めて二〇二六年六月に第九十七回の好文会を開催しました。

設立五年目に他のサークルに先駆けて、最初の詩集を発刊して、その後、設立十周年を記念して第二集を発刊、今般、第三集を発刊しました。

当初、十一名でスタートして、鬼籍に入られた方もいますが、新たに三名の会員を加えて、現在、八名の会員が玉井先生のご指導のもと、二か月に一回の詩稿提出に奮闘しています。

設立当初から十二年間に亘り、ご指導頂いた城田六郎先生には白玉楼から目を細めて見守って頂いており、本年十二月十七日に、第百回の記念すべき好文会が開催できることを会員一同楽しみにしています。

好文會詩集(第三集)

神奈川県漢詩連盟好文会

全国漢詩大会で 神漢連会員活躍

令和七年度『扶桑風韻』漢詩大会

最優秀賞・石川岳堂賞

高橋純子

江上

江上

春陰漠漠暮江涯 春陰 漠漠たり 暮江の涯
楊柳依依拂水垂 楊柳 依依として水を払ひて垂る
幼女未知兵革動 幼女は未だ知らず 兵革の動くを
征衣牽袖問歸期 征衣 袖を牽きて帰期を問ふ

四年程前、ウクライナとロシアの戦争が始まって間もない頃、新聞でウクライナ国内に残らなければならぬ父親と別れる家族の記事を読みました。そこには「娘は戦争のことをまだ知らない。このまま知らずに過ごしてほしい。」と父親の言葉がありました。この一文を読んだ時、杜甫の「月夜」を思い出して転句は参考にしました。結句は紙面の写真を眺めていた時に頭の中に聞こえた可愛い声「パパ、いつ帰ってくるの？」からできた句です。

石川忠久先生には漢詩を始めた時からたくさんのお話を教えていただきました。この度、石川先生の名前を冠した賞をいただき、大変光栄に思います。この賞に恥じぬよう、これからも精進してまいります。

優秀賞

小嶋明紀子

月夜

月夜

新婦擣衣江秋水 新婦 衣を擣ちて 江秋水なり
良人今夜守邊州 良人 今夜 辺州を守らん
誰堪一別已千里 誰か堪へん 一別 已に千里なるに
月照東西兩地愁 月の東西 兩地の愁ひを照らすに

この大会の詩題が「別れ」と発表された時、悲しくなり過ぎないように、「いつかはまた会える」という希望を残した作品にしようと思いました。「辺塞詩」と「閨怨詩」は表裏一体とよく言われます。国境付近で働く夫と、夫の帰りを待ちながら故郷で働く妻。起句で「妻」を、承句で「夫」をクローズアップし、結句で月が二人を同時に見守ると詠うことで「再会」への希望を込めました。

わたくしが主宰を務める「漢詩創作研究会」は十周年を迎えました。「他の漢詩実作の会では出来ないことを実現する会」として、今後も精進します。神奈川県漢詩連盟の会員の方もぜひご参加ください。お問い合わせはkanshisousaku@gmail.comまで。

佳作

久川憲四郎

萱堂遺梳

萱堂の遺梳

永別七年尋廢居 永別 七年 廢居を尋ねれば
鏡前空有一佳梳 鏡前 空しく 一佳梳有り
忽懷亡母曉妝影 忽ち懷う 亡母 曉粧の影
鬢雪齊齊意晏如 鬢雪 齊齊として 意晏如たりしを

橋頭晨別

橋頭晨別

松本祐輔

休詠陽關三疊詩 詠うを休めよ 陽関三疊の詩を
此聲盈耳不勝悲 此の声耳に盈つれば悲しみに勝えず
送君晨旦河梁別 君を送る 晨旦 河梁の別れ
折柳無言寄所思 柳を折りて 言無く 思う所に寄す

入選

宇野次郎

橋頭晨別

橋頭晨別

雨霽橋頭楊柳垂 雨 霽れ 橋頭 楊柳垂る
折來贈客曉風吹 折り来たりて客に贈れば 曉風吹く
昨宵瓊宴留君醉 昨宵の瓊宴 君を留めて 酔わしむ
皆謂人生足別離 皆な謂う 人生 別離 足ると

福田忠夫

津頭送別

津頭送別

年來故友出扶桑 年來の故友 扶桑を出づ
欲向巴西海路長 巴西に向かはんと欲して 海路長し
莫怪岸頭揮手久 怪しむ莫れ 岸頭手を揮ふことの久しきを
天涯地角兩茫茫 天涯 地角 兩つながら 茫茫たり

■神奈川県漢詩連盟の会員 相原一耀氏は令和七年十一月八日に逝去されました。(享年八十八歳)

ここに謹んで哀悼の意を表し、ご冥福をお祈り申し上げます。

■神奈川県漢詩連盟の会員 小山洋三郎氏は令和八年三月三十一日に逝去されました。(享年八十三歳)

ここに謹んで哀悼の意を表し、ご冥福をお祈り申し上げます。

神奈川県漢詩連盟 令和八年の行事予定

カレンダーに予定を記入しましょう

● 神漢連創立二十周年記念行事(詳細は二頁参照)

記念式典・講演会・懇親会

期 日 令和八年十月十三日(火)

時 間 午後一時～四時三十分(式典・講演会) / 五時～六時三十分(祝賀会)

場 所 横浜市開港記念会館(式典・講演会) / ブリーズベイホテル(祝賀会)

記念式典 功労者表彰、二十年の歩み解説、吟詠、講話

講演会 鷺野正明先生「美しい日本の風景―日本漢詩への誘い―」

尚、会員以外も聴講可。

参加申込 式典・講演会は申込不要。祝賀会出席者は後日発送予定の開催案内

に同封の振込用紙で振込願います。

● 自詠漢詩作品展

場 所 横浜市開港記念会館

期 日・時間 十月十二日十二時～十八時、十三日十時～十五時

● 吟行会

場 所 京浜急行・金沢文庫駅集合、称名寺など

期 日 十一月十七日(火) 午前九時半～午後二時

参加申込 本会報郵送に同封するご案内に従ってください。

● オンライン吟行会

期 日 八月二十四日(月) 午後一時三十分～

開催日が近づいた頃メールアドレス保有者全員に参加可否の問合せをします。

● 研修会

期 日 十二月十八日(金) 午後一時～四時

(予備日 十二月二十三日(水)(時間・場所同じ)

場 所 かながわ労働プラザ

編集後記

漢詩の魅力は、わずかな数十文字に「人間の真実」を凝縮している点にあります。千年以上前の詩が今も心に響くのは、そこに時代を超える人間の喜怒哀楽が息づいているからです。杜甫や李白らは、戦乱や左遷、愛する人との別れといった過酷な現実を直面しつつも、五言や七言の詩により個人的な悲しみを普遍的な感情へと昇華しました。漢詩は困難にある私たちに、自己を俯瞰する見方や考え方を与えてくれます。

漢詩に登場する大河や月、草木の描写は、人生の痛みを自然の循環に溶かし込み、「普遍的な考え方」を示してくれます。その考えは固まった心を解きほぐし、穏やかな感情や前を向いて生きる新たな光をもたらしてくれます。漢詩は孤独とともに生きる精神力を助け育み、絶望の中にも気高く在ることを教えてくれます。

詩を読むことは、時を越えて先人と語り合うようなものです。彼らの言葉は、人生の冬を耐える外套となり、再び歩き出す活力を与えてくれるのです。いつの時代でも誰でも悩み苦しみ生きてきたことを知ることにより、現代を生きる私たちに勇気をもたらしてくれます。今年には神漢連が創立二〇周年を迎えます。その年に素晴らしい漢詩の世界を素敵な仲間とともに楽しめることに感謝申し上げます。(佐野輝美記)

■ 神奈川県漢詩連盟の理事 飯島敏雄氏は

令和八年五月七日に逝去されました。

(享年八十四歳)

ここに謹んで哀悼の意を表し、ご冥福をお祈り申し上げます。